

# 第2部 平成27年度研究成果報告

## 1 各班の研究進捗状況（環境史研究および地域比較研究）

### 民俗・人類班による研究の進捗状況

蛭原一平

#### 1 民俗・人類班による研究の目的と方針

民俗・人類班は、研究代表者の田口洋美（民俗学・地理学・人類学・環境学）を中心とし、学内からは謝黎（文化人類学）、蛭原一平（地域研究・生態人類学）が、学外からは佐々木史郎（社会人類学）、川島秀一（民俗学）、森本孝（民俗学）、鈴木清（民俗建築学）、思沁夫（文化人類学、生態人類学）、阿部朋恒（文化人類学）および高橋満彦（法学）が共同研究者として参加し組織されている。

本研究プロジェクトにおいて民俗・人類班は、自然災害や政治経済的な環境変化に対し生業形態や集落維持のための様々な慣習・権利関係をつくり替えてきたプロセスに着目し、近代以降の集落変遷に関する事例研究（地域比較研究）を担う。とりわけ、近代以降の「現金収入獲得志向型の生業」（田口2002）が選択される過程や、戦後以降の補助金支給など国家的政策との関連においてそれらを具体的に検証することが中心的課題である。そのうえで、過疎高齢化の進行に伴い地域芸能や生業技術など伝統的文化の継承が困難になっている（文化継承にリスクを伴う）現代社会において、集い住むことの意味を問い直すとともに集落再編のあり方について探ってゆくことを目指している。

民俗・人類班では、モデルとなるような個別の集落を対象とした事例研究と、地域横断型の比較研究という二つの研究アプローチをとってきた。事例研究では、東北地方の農山漁村を対象とした国内研究に加え、中国の少数民族集落（村落）を対象とした海外研究も実施してきた。これら少数民族社会では、定住化政策など60年代以降の国家政策や80年代以降の市場経済の急激な浸透などを背景に生業変容がすすみ、人々がともに暮らす「場」としての集落機能が変化していることが考えられる。内蒙古自治区のトナカイエヴェンキヤオロチョン族と、雲南省のラフ族（苦聡人）の事例からそれらの諸相を明らかにした上で、移転集落や急激な生業変容を経験した国内の個別事例と比較することで集住することの現代的意味や文化継承のあり方について考究する。

また、「空から見た東北」（田口提唱）、「海から見た東北」（田口・川島提唱）と名付けた地域横断型の比較研究では、空や海からの視点による集落景観の変化の分析および地域間比較をおこなう。そして、自然利用や生業活動の変化パターンの広域的な共通性と地域個別性を抽出しその背景について考察をおこなう。

本研究プロジェクト4年目以降は、それまでの3年間において実施してきた現地調査の結果をまとめるとともに、補足的な資料収集を随時おこなってゆく。同時に、考古班、歴史班など他班との共同研究や、法社会学や工学系環境デザインといった分野と集落再生に係る現代的な課題について相互議論を重ねることで応用研究をすすめてゆく。

#### 2 今年度の取り組み

民俗・人類班では「地域比較研究」の国内での事例研究に関し、「地域資源活用研究」の調査と連携させた資料収集を研究プロジェクト初年度よりすすめてきた。本年度も、昨年度より着手した山形県鶴岡市

大鳥を対象とした学生主体の集落調査を7月、9月、11月、2016年1月の計4回実施した。同じく昨年度より開始した山形県飯豊町・長井市での学生を主体とした集落調査に関しては、調査テーマと計画の見直しをおこない調査地を西置賜地方の白鷹町深山・萩野地区へと変更することとした。そして2016年1月に第1回目の現地調査を実施した。また、川島や鈴木と歴史班の中村らが中心となり実施してきた唐桑半島（宮城県気仙沼市）鮎立集落での学生主体の集落調査も、今年度は4、6、8、12月の計4回おこなった。その一連の調査結果をまとめたブックレット（「東北一万年のフィールドワーク」シリーズ）は今年度内の刊行を目指している。

なお、「地域資源活用研究」では〈むらの記憶〉と題したシリーズのブックレット刊行にも取り組み、昨年度末（2015年3月）には、森本・鈴木・蛭原が執筆編集をおこない本シリーズ2冊目となる『下北半島野平一写真に見る戦後開拓村の歩み』を刊行した。本年度4月に、本ブックレットの現地への配布をおこなったところ、多数の寄贈依頼を受けるなど大きな反響を得た。

「地域比較研究」の海外研究としては、これまで継続的におこなってきた雲南省紅河州金平県南科村での現地調査を謝・蛭原・阿部が9月に実施した。本調査では、南科周辺の自然村に関しても観察・聞き取りをおこない新たにできた南科村との相違について議論するための資料を得た。なお、田口・思によってすすめてきた内蒙古自治区の事例研究に関して今年度は現地調査を実施せずデータの整理に専念することとし、まとめに関する班内打ち合わせを2016年2月におこなった。

一方、地域横断型の比較研究として「空から見た東北」、「海から見た東北」と称する一連の調査研究活動をすすめてきた。前者に関しては、10月に、田口・蛭原によって福島県・宮城県沿岸部（福島県福島市、郡山市、棚倉町、いわき市～南相馬市～相馬市～宮城県名取市および仙台市一帯）を対象とした集落景観の撮影記録をおこない資料の拡充を図った。そして、昨年度立ち上げたHP（「空から見た東北―集落景観の記録写真」<http://blog.tuad.ac.jp/airphoto/>）での公開に向けこれら写真資料の整理をすすめた。後者の「海から見た東北」の一環として森本が10月に三陸沿岸（岩手県大船渡市、釜石市、宮古市）の漁業集落において調査を実施し、その結果をまとめ「復興の海」という特集を組んだ『東北学』07号にて発表した。

以上は民俗・人類班が主体となり本年度実施した調査活動であるが、これらに加え、前年度（2014年度）末より開始した応用研究に関わる研究会も開催した。その一つが、歴史班と合同で10月に東京農工大でおこなった漁業権に関する研究会である。本研究会では緒方賢一氏（高知大学）らを講師に招き、漁村集落の維持・再生を考える上で重要な論点となる、沿岸漁業権の継承問題や地先利用慣行と近代法との関係などについて歴史的な成立過程を見直しながら議論をおこなった。また、12月には田口・蛭原が、東京大学にて都市計画を専門とする寺田徹氏（東京大学）と研究打ち合わせをおこない、工学系環境デザイン分野の研究者との課題のすり合わせや共同研究（応用研究）への参画のあり方について話し合った。さらに、2月に田口、謝、蛭原、思が参加し、海外研究のまとめ方や、国内の事例研究へ調査結果をフィードバックさせる比較研究の方向性について確認、議論する班内研究会を本学にて実施した。

### 3 成果と来年度の展望

今年度も、海外調査（中国雲南省）ならびに地域横断型比較研究（「空から見た東北」）に関し継続調査を実施し、データのさらなる蓄積をすすめることができた。さらに「海から見た東北」に関連し、森本や川島も「復興の海」を特集テーマとした『東北学』07号にて三陸漁村の復興状況や気仙沼（大鳥）漁師の漁業記録について報告をおこなった。

国内の個別事例研究に関しては、「地域資源活用研究」と連携させた調査活動を、山形県鶴岡市大鳥地区ならびに西置賜郡白鷹町深山・萩野地区という2地点において本年度より新たに本格始動させた。これらは本プロジェクト最終年度にあたる来年度内に調査を終了させ、ブックレット（「東北一万年のフィー

ルドワーク」シリーズ) 発刊までを目指しており、効率的な調査の実施計画が求められる。

来年度は、これまで得られた成果のとりまとめと、上記ブックレットの編集ならびにそのための調査が主な活動内容となる。とりわけ、成果のとりまとめにおいては、これまで実施してきた、集落に付随する様々な権利、資源利用慣行に関する歴史学、法学との合同研究が核となるため、関連テーマでの研究会を定期的開催したい。また、「空から見た東北」、「海から見た東北」あるいは海外の事例研究に関しても研究会等を随時おこない理論化をすすめるとともにWSや関連学会での発表などによって成果発信にも努めたい。同時に、本年度より開始した工学系環境デザイン分野の研究者との共同研究も民俗・人類班が牽引し、上記の成果、議論を踏まえた上で課題のすり合わせをおこなってゆく。そして、最終的にはシンポジウム開催などを通じ、本プロジェクト全体に係る成果発信にも寄与したい。